

かめじいの

こうふのツボ

甲府には面白い「ツボ」が
たくさんあるじゃろう？
甲府市ホームページ
『甲府の魅力、大集合！
大好き！こうふ市』
にも掲載しているので
ぜひ見てくだされ。



発行：甲府市広報課

わしは「かめじい」。
甲府のことなら何でも
知っているのじゃ。
甲府のおさえておきたい
「ツボ」を紹介
するのじゃ



連歌は、複数の人が「5・7・7」の片歌で問答する日本の文学の一つです。その連歌は、甲府の酒折宮から始まったといわれています。

『古事記』には、「倭建命(やまとたけるのみこと) (日本武尊)」が東征の帰路、酒折宮に立ち寄り、

新治(にいばり) 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる
(新治、筑波の地を通り過ぎて、ここまで幾晩寝たのか)

と問いかけたところ、かがり火を焚(た)いていた老人が、

かがなべて 夜には九夜 日には十日を
(日数を重ねて、夜では九夜、昼では十日ですよ)

と答えたと記されています。

倭建命は、その老人の才能を誉めて「東国造(あづまのくにのみやつこ)」の称号を授けたそうです。

この片歌問答が連歌の起源、また、酒折宮が連歌発祥の地とされ、その後、酒折宮には山口素堂をはじめ、多くの文学者・学者が参拝するようになりました。

現在では、連歌の普及を目的に毎年行われる「酒折連歌賞」。毎回全国からたくさんの応募があります。



▲酒折宮拝殿



▲酒折宮境内には連歌発祥の由来となった連歌の碑も

近年の調査で、武田氏の築城技術の特徴と言われる三日月堀が武田氏館跡(武田神社)で確認されました。

三日月堀とは、館の大手口(※1)を三日月状に丸く覆うような形をした堀で、内側に土塁をともなう丸馬出(まるうまだし)と呼ばれる、敵から館を守る防御施設の一部です。全長は約30m、幅は約4～5m、深さ約2.5mと推定されています。また、『甲陽軍鑑』には山本勘助が信玄の前で馬出の重要性を披露し伝授したという興味深い記述もあります。

※1 大手口…城館の正面玄関。防御のうえで一番重要な場所

三日月堀を含む丸馬出は、信濃・駿河・遠江・西上野などの武田氏が侵攻した地域の拠点となる城郭で確認される例が多く、これまで侵攻先で発達した施設と考えられてきました。



▲三日月堀は、このような形だったと推定されています(2006年撮影)。

山梨県内では、武田氏最後の居城となった新府城(韮崎市)の大手口のみを確認されているだけで、この発見は、三日月堀の技術や意味を知るうえで重要なものだと考えられています。

皆さんは、「甲斐八景」をご存じですか？およそ300年前、甲府藩主だった柳沢吉里が「近江八景」（現在の滋賀県）にならい、山梨県内で選んだ8か所の名勝地のことです。

《甲斐八景》 * 印…甲府市内の名勝地

夢山春曙(ゆめやましゅんしよ)*…夢見山の春の夜明け

竜華秋月(りゅうげしゅうげつ)*

…護国神社周辺にあった龍華山永慶寺から見た秋の月

金峯暮雪(きんぷぼせつ)*…金峰山の夕方の雪の眺め

酒折夜雨(さかおりやう)*…酒折宮の夜の雨

石和流螢(いさわりゅうけい)…笛吹川(笛吹市)の螢

富士晴嵐(ふじせいらん)…晴れた日の富士山

恵林晩鐘(えりんばんしょう)…恵林寺(甲州市)の暮れの鐘

白根夕照(しらねせきしょう)

…夕日に輝く白根三山(北岳、間ノ岳、農鳥岳)



吉里は、京都の8人の公卿に頼んで、八景の情景ごとに和歌をつくってもらい、中御門天皇の許可を得て「甲斐八景」を定めました。大泉寺(古府中町)には「夢山春曙」の歌碑が建てられています。

「きのふまで めなれし雪は 夢山の
夢とぞかすむ 春のあけぼの」

▲大泉寺の歌碑

正ノ木さんとして親しまれているお祭りは、太田町の稲積神社の祭礼です。

稲積神社は、もとは現在の甲府城跡に祀られていましたが、甲府城築城に伴って現在地に移り、400年以上が経ちました。お祭りもそのころから行われているようで、やはり長い歴史をもっています。

正ノ木稲荷祭りは、毎年5月2日の夕方から5日の夕方にかけて盛大に行われます。県内はもちろん、近県や関西方面からも大勢の人が訪れ、中央線・身延線ともに臨時列車を増発していた時期もありました。

立春から数えてちょうど88日目(八十八夜)にあたる5月2日ごろは、春から夏に移る節目の日として古くから重要視されてきました。また、霜の心配もなく安定した気候になることから、かつて農家ではこの時季に種まきや苗の植え付けにとりかかったそうです。

今では植木市のイメージが強いお祭りですが、もともとは農機具や苗、種が売買される市でした。

「どっこいしょの正ノ木さん」という言葉は、農家の人祭りを境に腰をあげて働きだすという意味で、今でも何か活動が始めるときの合言葉として耳にしますね。



稲積神社の境内には、「まよい子しるべ石」という石塔があります。石塔の右側の面には「たずぬる方」、左側の面には「志らする方」と刻まれていて、それぞれに迷い子の特徴と心当りの子どもの様子を書いた紙を貼ることができるようになっています。

「正ノ木さん」は安売りで知られ、たくさんの人出があったことから、江戸時代には「千両祭り」と呼ばれていたほどでした。とても賑わう中、迷い子もたくさん出たことでしょう。しかし、このしるべ石に貼り紙をすると、すぐに子どもは見つかったそうです。

一方、裏側には「是より百度参」と刻まれていて、この石塔には神社へのお百度参りの起点(百度石)としての役割もあったようです。

人出の多い神社やお寺にしか存在しない、まよい子しるべ石はそれ自体、数が少なく、さらに百度石としての性格も併せもつものはほとんどないため、このしるべ石はとても貴重なものなのだそうです。



▲左側がまよい子しるべ石

太田町にある一蓮(れん)寺本堂の参道に、「味噌なめ地藏」というお地藏さんが安置されているのをご存じですか？

自分の体で調子が悪い部分と、お地藏さんの体の同じ部分に味噌を塗ってお祈りすると、病気が治るといわれ、いつも味噌が塗られています。

このお地藏さんは、正徳年間(1711～1715年)、川内道村という僧により一蓮寺に建立されました。

当時、五穀豊穡への感謝と健康祈願のために地藏を建て、祭りを行ったところ、病にかかった旅人がたちまち全快したといわれています。

その後、人びとの間に、この霊験あらたかなお地藏さんに味噌をつけてお参りする風習がうまれ、「味噌なめ地藏」と呼ばれるようになりました。

甲府空襲の大火にも焼け残り、今もなお、病気回復・無病息災を祈願する参拝者が絶えません。

一蓮寺では、以前、味噌だらけの姿を毎日洗っていたそうですが、現在は年に1回、年末年始に洗い流すそうです。



▲味噌なめ地藏が安置されているお堂
戦後、建てられたお堂の中に安置されています。参拝者が持ち寄った石像もたくさん並んでいます。



▲味噌なめ地藏
味噌がたくさん塗られています。特に顔は、目と鼻以外くまなく、たっぷり！座像で高さは85cm。赤色の衣や頭巾を奉納する人がたくさんいるそうです。

アメダス(AMeDAS)※1は昭和49年から運用が開始され、現在、全国で約1,300か所が約17km間隔で設置されています(県内は15か所)。このうち約480か所が降水量のみの観測。約850か所で降水量、風向・風速、気温、日照時間を、また、雪の多い地方では積雪の深さも観測しています。

※1 アメダス(AMeDAS)・・・「Automated Meteorological Data Acquisition System」の略「地域気象観測システム」の意味

古関町では、昭和27年に上九一色小学校に観測所が設置され、当時は、雨量のみを観測していました。利便性をはかるため、昭和36年に個人の敷地内に移設され(現在では、全国的にも珍しい)、昭和53年から降水量、風向・風速、気温、日照時間を観測しています。

現在は、24時間休まず10分間隔で自動観測を行い、気象庁にデータを送信しています。アメダスのデータは、気象災害の防止や軽減にも重要な役割を果たしています。

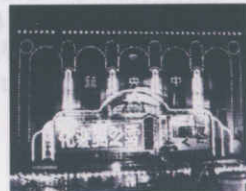


▲(左から)雨量計/風向風速計、日照計/電気式温度計/データ変換装置

明治30(1897)年11月5日、桜町通りの芝居小屋「桜座」で、県内で初めての活動大写真(現在でいう映画)の上映興行が行われました。まだ市内に電灯が普及していないころで、全国的に見ても同じ規模の都市の中では早い時期の上映でした。

この時に用いられた映写機とフィルムは、アメリカから直接輸入されたもので、とても高価だったため、東京の商社から期限付きで借りてきたものだったといわれています。また、中央線の東京一甲府間がまだ開通していなかった当時、重い映写機と燃えやすいフィルムを東京から運んでくるのも大変な作業でした。

活動写真の上映は、新聞広告でほぼ毎日大きく宣伝されたこともあり、上映期間中、連日超満員となる大盛況で、当初は1週間の予定だった上映期間が10日間に延長されたほどでした。



▲大正14年に建てられた中央館(旧柳町)
(写真集「甲府物語」より)

それまで市民の娯楽といえば、歌舞伎などの芝居見物や浪曲・落語といった寄席などが主流でしたが、この上映を皮切りに、「動く写真」に魅せられた市民の関心は活動写真へと移っていききました。

その後、活動写真は黄金期を迎え、市内には5つの活動写真館(常設の映画館)が建ち並ぶほどになりました。

「オリオン・スクエア」として新しく生まれ変わったオリオン通り商店街。「オリオン」という名称は、ある映画館に由来することをご存じですか？

現在のオリオン通り周辺はかつて、上級公務員の官舎街でした。大正15年に南北の通りが開設されると、繁華街への近道として人びとに利用されるようになりました。昭和20年の甲府空襲で、この辺りも焼け野原になりましたが、その後に建てられた貸店舗長屋が復興への原動力となり、甲府駅と中心街を結ぶ主要な道路となりました。

そのころには「人の流れを地域の発展につなげるため、この場所を商店街化するべきだ」という声が上がるとなり、昭和23年、通り沿いにあった検事正宿舎が移転し、通りの両側に商店が建ち並び、商店街が誕生しました。その一画に「オリオンパレス」という映画館があったことから「オリオン通り」と呼ばれるようになりました。

オリオンパレスは市内で初めての洋画専門館でした。『風と共に去りぬ』『カサブランカ』といった名作も上映され、若者たちでにぎわったそうです。

由来となったオリオンパレスは、昭和32年に廃業してしまいましたが、「オリオン」という名は現在も親しまれ続けています。



▲昭和初期のオリオン通り
正面は甲府電力
(現・東京電力山梨支店)



▲オリオン・スクエア
(平成22年9月14日現在)

赤ん坊を背負った子守姿の児童が唱歌を歌ったり、体操をしたりしていた学校が、かつて甲府にありました。

明治5年の学制公布により、甲府にも小学校ができましたが、授業料が有料だったことや家計を助ける労働力として子どもの手が必要だったことなどから、就学率は必ずしも高いものではありませんでした。特に、女子は住み込みで子守の仕事に従事することも多く、そのために学校に通うことができない場合もありました。そこで、子守をしながらでも通学できるようにと、明治33年に開設されたのが「子守学校」でした。

この子守学校は、児童が子守をしながら放課後の教室で、読み・書き・算術・訓話・唱歌・体操などの授業を週2回受けるというもので、2年間の課程でした。当初は琢美教場(現在の善誘館小学校)に設けられましたが、翌年、相生教場に移ったことから「相生子守学校」と呼ばれました。



▲相生子守学校の記念写真
(明治43年撮影)

相生子守学校は、その後歳月の経過とともに内容が充実し、県内外からの視察や新聞・雑誌の取材が相次ぐほどでした。

明治40年には市立の学校として認可されるとともに、新たに琢美教場にも開設され、昭和3年まで続けました。子守学校の運営は、教師たちによる無償の奉仕と市民からの寄付によって支えられていました。子守学校の卒業生からの寄付もあったそうです。

方代(ほうだい)は大正3年11月1日、右左口村で8人兄弟の末っ子として生まれました。「方代」という名前は、長女と五女以外の子どもを亡くした両親が「生き放題、死に放題」にちなんで名付けたといわれています。



15歳ごろから作歌を始め、山崎一輪の名で新聞や雑誌に投稿をしていました。昭和12年、母が亡くなり、翌年、父と共に姉の嫁ぎ先(横浜)へ移った後、太平洋戦争で右目を失明し、左目の視力もわずかに。

街頭で靴の修理などをしながら各地を旅したことから、「漂泊の歌人」と呼ばれるようになります。昭和47年から亡くなる昭和60年までの間は鎌倉に住み、いくつもの名歌を残しました。

方代の歌は、口語体であることが特徴です。

自らを「無用の人」と言い、世間から離れて暮らしていた方代は、生涯独身であり、孤独で寂しい生活の中、ありのままの素直な表現でいくつもの歌を生み出しました。

- ・ふるさとの右左口村(むら)は骨壺の底にゆられてわががえる村
- ・一度だけ本当の恋がありまして南天の実が知っております

死後20年以上経った今、高校の国語の教科書や映画で取り上げられるなどして、方代は注目を集め、現在も多くの人を魅了し続けているのです。

右左口町には歌碑が26あり、全国から方代のファンが訪れ、毎年、命日(8月19日)には菩提寺である円楽寺(右左口町)で方代忌が営まれています。

古閑町の永泰寺には珍しい釈迦如来像が安置されています。京都の嵯峨野にある清涼寺の像をモデルに作られたため清涼寺式と呼ばれる像で、全国に100体ほどしか現存していません。

具体的には、(1)頭部の螺髪(らはつ、ぶつぶつ状の髪の毛のこと)が、渦を巻く縄目状になっている(2)衣服に両肩を通し、首の下まで覆われている(3)あごの下から同心円状になっている胸の部分の衣文(えもん)(4)胴腿の境目のY字部分の処理方法、などの点が典型的な如来像と異なり、異国的な特徴をもっているといわれています。

では、なぜ山里深い永泰寺に、異国風の仏像が安置されているのでしょうか？

10世紀末、東大寺の僧・齋然が中国の宋に渡り、如来像を持ち帰って清涼寺に安置しました。その像はインドから中国へ伝わった釈迦像を模刻したもので、インド・ガンダーラ風の特徴を強くもっていたのです。やがて鎌倉時代、清涼寺の像を模刻・信心することが全国的に盛んになり、その中の1体が永泰寺に辿りついたようです。

永泰寺の像は鎌倉時代の中～後期の作と考えられていますが、残念ながら正確な年代はわかりません。現在、県の文化財に指定されていますが、とても精巧な作品で、もし作られた年代が刻まれていれば国の重要文化財になっただろうともいわれています。

この貴重な釈迦如来像は4月8日の花祭りの日に1日だけ開帳され、毎年多くの参詣者が訪れています。



右左口町の下宿(しもじゅく)にある地蔵は、元禄13(1700)年に建立されたといわれ、県内でも最古級の厄除け地蔵です。地元ばかりではなく、近隣の市町村からも大勢、祈願や供養に訪れます。

自分の体の痛い(病んでいる)部分と地蔵の同じ部分を石でたたくと良くなるといわれ、このときに出る音から「カンカン地蔵」とも呼ばれ、古くから大切にされてきました。



写真のように、カンカン地蔵は長年に渡って石でたたかれていたため、各所がへこんでいます。

この地蔵は中道往還(甲斐と駿河とを最短で結んだ古道)沿いで、右左口宿の集落を向いて鎮座しています。上宿(かみじゅく)にも厄除け地蔵があり、その地蔵と向かい合っていることから「宿場の守り神」ともいわれています。

右左口宿は、中道往還の重要な宿場の1つです。特に、江戸時代には旅人や商人、富士山参詣者などが立ち寄り、大変にぎわいました。多くの人がこの地蔵に長い旅路の無事や商売の安全を祈願したことでしょう。

甲府の蕎麦(そば)店に入ると、蕎麦と一緒に「鳥もつ煮」を食べている光景を目にします。

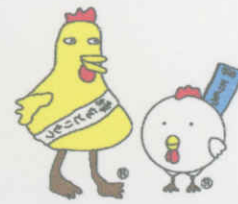
今や、蕎麦店をはじめとした市内各所で味わうことができる鳥もつ煮は、県外にはないもので、昭和25(1950)年ごろに市内の蕎麦店で誕生したそうです。当時、調理方法がなく当たり前のように捨てられていた鶏の内臓を、活かす方法はないかと精肉店から相談を受けた蕎麦店が、工夫を凝らしてつくり上げたのが鳥もつ煮で、独特の照りと香りが特徴です。

江戸時代の甲府では、鶏・鴨・雀・山鳥などいろいろな種類の鳥を食べていたそうです。また、明治時代の料理店の広告を調べてみると「かしわ鍋」、「しゃも鍋」、「鴨鍋」などが記されています。こうした鳥料理を食べる習慣が、後に鳥もつ煮を生み出す原動力になったのではないかと考えられます。

現在、鳥もつ煮を食べることができる店は市内に約50軒あり、「ほうとう」や「煮貝」などと並ぶ甲府を代表する食文化の一つになっています。



▲鶏の砂肝・ハツレバー・きんかん(産む前の卵)などを濃厚な甘ダレで煮込んだ鳥もつ煮



▲「みなさまの縁をとりもつ煮」活躍中! 市職員有志で組織したボランティアグループで、鳥もつ煮で甲府の地域活性化に取り組んでいます。